

吉井勇論(Ⅲ) 第一章 家系 その三

鷲 只 雄

はじめに

私はこれまでに吉井勇について二つの拙稿(吉井勇「酒ほがひ」
〔明43・9・7 昴発行所〕に全注釈と解説を施した拙著「明治書
院・近刊予定」及び「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐって
——」〔平8・3・14「国文学論考32号」都留文科大学国文学会〕
参照)を書いただけの、短歌にも、勇にも全くの門外漢であるが、
その素人の気楽さから率直に言わせてもらおうと、吉井勇の研究は非
常に遅れていて、伝記の面でも作品研究の面でも基礎的、基本的な
調査さえ行われていないのが現状である。勇の第一歌集「酒ほがひ」
に全注釈を施す仕事をしてみて、そのことが肌身にしみてわかると
同時に大いに困惑した。家系や伝記について信頼すべき調査は殆ど
なされておらず、勇の回想に従っているのが実情で、そのため回想
には思い違いや齟齬が多く、それが何時のことなのか、それが本当
なのかどうか判断できない事態に遭遇することになったからである。

また作品についても同様で、作品の初出調査もごく一部になされ
たのみで、永く放置されたままであった。

そうした状況からの前進をめざして前掲の拙稿では資料の新たな
発掘と調査とを試みた。これに対して早速、歌人で短歌史研究の重
鎮である篠弘氏が「東京新聞」の「短歌月評」(平9・1・5 2面)で、
子規・左千夫・茂吉をはじめとする根岸短歌会にたいして、新
詩社の「明星」派の歌人研究が遅れている。夭折した啄木ぐらい
ではないか。「白秋全集」が完結した白秋もむしろこれからであ
る。鷲只雄「吉井勇論序説——初期習作と家系をめぐって」(都留
文科大学「国文学論考」32号)といった研究が、ようやく出現し
てきた。

として、紹介して下さったのは望外の幸であった。もっぱら二十
世紀の小説を研究対象としてきた専門外の私にとってはこれは大き
な励ましであり、稿を続ける上での支えとなったからで、氏のご厚
情にあらためて感謝しておきたい。

前稿にも記したように、吉井家の家系——特に祖父友実についての膨大な資料と、父幸蔵についての資料については既にマイクロフィルム化して入手しており、目下解説・整理中であるが、B4判で恐らく一万枚を越すと思われる分量であり、書類・書簡の年月日決定・更に殆どが達筆な毛筆で書かれていてその判読に時間がかかるなど、困難な問題が山積しているため、それら全てが解決してから発表ということになると、いつのことになるかわからないので、とりあえず、祖父友実の日記を整理要約して彼の生涯の行実を明らかにした上で、周辺の事実を積み重ねていくことにしたい。

祖父友実から始めるのには、幕末まで「薩摩藩の軽輩」(吉井シヅ子「勇の母」)「私は百二歳・一世紀を生きてきて」昭和42・3「文芸春秋」引用は山崎朋子編「女の生き方40選 上」平7・4・10文春文庫 による)であった吉井家を友実が、西郷隆盛や大久保利通と共に国事に奔走して大いに家名をあげた中興の祖であるから、彼は明治天皇の信任厚く、伯爵となり、元老院議員・日本鉄道会社社長・宮内次官・枢密顧問官などを歴任した(一八二一年生まれ、九一年没)。

また、友実は勇の言によれば「歌の師」(「解説」昭27・7・25「吉井勇歌集」 岩波文庫)でもあるから、実際残された資料からみても、友実は自由に歌を作り、知友と歌会を催し、絵を描き、歌日記や紀行文をものするなど、殺伐無風流な薩摩隼人とは大いに趣を異にし、風流韻事を楽しむ風雅の士でもあったことを証しているから、その点からも友実の究明は重要であるが、その点については前掲の拙稿でふれたのでここでは繰り返さない。

ここで友実の日記というのは宮内庁書陵部蔵「三峰日記」のこと

で、一から七まで全七冊あり、明治2年2月26日(本文を除いて題簽類は「自明治二年五月」と記すが、これは臨時帝室編修局で正一年一月に吉井家から借用して転写した際に誤記したものと思われる。というのは本文は「明治二年二月二十六日」から記述されているからである)から明治21年1月10日まで記されている。

無論、途中の脱落も多い。

先程もふれたようにこれは原本ではなく、毛筆による転写本なので体裁については簡単にあておくと、和綴じの冊子本で、タテ27・3センチ、ヨコ20センチ、タテ野一頁10行。第一巻の本文記載頁数は137であるが、これは巻によって多少の異動がある。参考までに記すと、日記の本文記載頁数は次の通り。

- 一——三七頁(明2・2・5・5)
- 二——五二頁(7・3・7・12)
- 三——五九頁(12・1・12・12)
- 四——六六頁(13・1・13・11)
- 五——四三頁(14・1・14・9)
- 六——一八四頁(16・1・16・12)
- 七——八〇頁(17・1・21・1)

繰り返して言うが、以下の日記の記述は「三峰日記」の翻刻ではなく、私が必要と思われる部分を取捨選択の上、それを整理し、要約したものである。原文を一、二例示する。

明治二年二月二十六日

中将公前浜御乗船正午御出帆同二八日夜十二字大坂川口へ御着船

同二九日御上陸本願寺へ御宿陣相成ル

岩倉卿御在坂ニ付淀橋御上り場ヨリ直ニ御使者被仰付

長州侯二八二六七日頃御上京相成候由承ル

永山源藏へ公用人被仰付候御書付相渡ス岩倉卿へ二ヶ條之御趣意

申上云々ノ御返答アリ

三岡八郎會計方被免長岡左京御召捕相成タル由

函館千人計決死其外瓦解ノ勢ニ候由

東京奥羽之間平穩

攘夷家盛ニ成立有志会ナド有之候由

木戸未夕帰京無之広沢病氣ノ由

同年三月五日

林良輔野村右中建白書持參今晚入御覽候所願クハ両藩御寵遇之願

意列藩へ推及一視同仁之

叡慮貫徹仕候様之御趣意書加へ方御沙汰有之

原文は右のような漢文訓読体・漢文体・候文体などの混淆した独特の文体で書かれており、また、日記であるために人物の説明などがなく、しばしばいきなり固有名詞が登場するために理解の困難な部分もある。

凡例

以下に本稿の日記を記述するに当たつての凡例を示しておく。

1 原文の趣を出来るだけ尊重して文語調を模したが、表記は新字、

新仮名とした。但し、詞書、和歌などについては原文通り旧仮名とし、その他の場合についてはそのつどことわつた。

2 友実の行実を主としたために、それからズレルものについてはカットしてあることをおことわりしておきたい。ただし、固有名詞についてはできるだけ拾い上げることとした。

3 外国の地名の表記で確認できるものについては、可能な限り今日の表記に改めた。同じく人名については確定しがたいものが多いので原文の表記のままとした。

4 誤記・誤脱と思われるものについては改めたが、中には（）を付して。その中に正しい表記を示した場合もある。

5 時刻表示は1〜24時制とした。

6 () 内の記述はことわりがない限り、鷹の付した注である。

7 以上がそのあらましであるが、これ以上の件についてはそのつどことわつた。

以上のようなまえがきと凡例を付した「はじめに」をつけて拙稿「吉井勇論(1) 第一章 家系 その一」(97・3・31「都留文科
大学大学院紀要1」)同「吉井勇論(2) 第一章 家系 その二」(98・
3・23「都留文科大学大学院紀要2」)を発表した。本稿はそれに
続く第三稿で、明治13年6月1日〜同14年4月30日までの期間のも
のである。

猶、冒頭に記した拙著「和歌文字大系29 桐の花／酒ほがひ」
(明治書院・今西幹一氏と共著)は98・4・15に刊行された。

明治二三(1880)年(承前)

6月1日 工部省へ出仕。午後平岡来り、段々事情を聞く。

2日 大脇、着。清水来る。

3日 大隈参議を訪ね、三池炭坑の事情を詳しく報告。

5日 御陪食を仰せ付かる。同席者は有栖川、北白川、東伏見の三宮、西郷、山田の両参議、加藤弘之、三好陸軍少将、林海軍少将などなり。食後、皇居建築の事情など申し上げる。

6日 岩村高俊邸へ、兄通俊に招かれ終日遊ぶ。松方、三浦安が同席。会席料理なり。円朝の話あり。

8日 退庁時に旧知事に参上、拜謁し山ケの一件と荒川洋行の一条を詳しく申し上げる。帰途、山尾へ招かれ会席料理を御馳走になる。時に平川町に火事との知らせで先に帰る。烈風のため一時はよほど危険であったという。

9日 赤羽へ臨幸、器械所を見学され、玻璃器をお持ち帰りになされる。

10日 三田農具器械所を見、そこから島津忠寛殿邸にて池原日南の送別会あり。

旅衣木曾の河瀬を下る時

みなものもとにおもひ出南

鮎の画にそえて送る。

この夜、寺島で夜会、芝居あり。団十郎、左団次の勸進帳面白く、24時帰宅。

11日 副島氏を訪う。日本は貧国にてはなきやとの説あり、いずれ節儉をもととするにしくはなし。大隈が外国債論云々の説も出る。

今日三条殿より、工部卿に外国債は不可、節儉を行うべしとの詔勅が下った旨、達しあり。

13日 正之丞、幸蔵、寅治を同伴して昼前から隣農舎へ行く。途中高輪万清で昼食。舎は樹林繁茂し、実に快然たり。

14日 米花堂に岩村通俊、林董、伊地知恒庵、土岐某、松田、本莊などを招き、碁会を催す。村瀬、中川の手合わせは先番中川の四目勝ちなり。他に内垣、おたかも来る。野津七病気につき訪問。

15日 工部卿と皇居造営の現場を検分す。試錘42箇所あり。午後参内し、委細言上。明日御発聲につき暇をいして退出。

16日 5時30分参朝し、酒肴を賜り拜謁後7時に御発聲、四谷御苑までお送りし10時前に帰宅し一睡す。今夕宮島へ招かれ、清国公使何如璋、黄遵憲、張斯桂、副島、榎本、上杉、長岡等来会し、種々馳走あり。これは中川某のために催す所なり。

17日 伊地知正治の母の33年祭につき招かれる。昨日歌ありとて示す。

いでましの甲斐の大路やいかならん

けふはくもれり五月雨の空

予も一首を詠む

いでましのけふふる雨は民草の

うる不ふ天のけしきなるらん

今日工部大輔に昇進する。有栖川親王のお取り次ぎなり。内閣に出頭し、三池炭坑の件につき演説する。

18日 本田親雄の主催で米花堂にて画会あり。正治も来る。

19日 22時頃男子出生。

20日 大脇と同道、夕方から川長へ夕食に行く。

21日 前田、鈴木金蔵、中井などを訪う。今夜半、なを悪感を覚え、由良に頼むと直ぐ来る。

22日 本日不参。渡瀬来る。なを今夜少しくよし。宮島来る。

23日 今日少し快し。前田正名来る。今日も不参。伊藤参議来訪し、財政、内閣のことにつき深密の談あり、愕然たる事多し。もだしがたき心情を生じ、今夕松方を訪い談せんとして車を飛ばして行くが不在、手紙を残して帰る。24日 今朝、松方来る。7時から10時まで談話す。ただ財政の事のみ。今日出省。

25日 稚児命名の祝いをする。幸治と名付け歌を詠む。

幸に治る御代に生れつ、

名をさへそれといはふけふ哉

今日宮島、岩谷など来る。

26日 岩谷にて昼飯に豚汁を馳走になる。中井、宮島、伊集院など同席。食後宮島と日本橋辺を散歩し、得能を訪う。今夜、ベールに招待され、西郷、大山、遠武、安田など同席する。古伊万里の焼物皿三枚を送る。

27日 本田、伊地知恒庵来る。午前から鑑賞会に行き大脇も同伴する。藍田俶の山水、本日出品中の一等と見えたり。予も如雪の布袋、明恵の如来式を出す。午後から上野辺

を散歩し、池之端で唐紙を買い、また骨董屋で西洋七首一本代80銭、香盒船形の焼物一個代50銭を買う。それより八百善にいたり夕食、夜に入つて帰る。琳瓏閣にて立原の画を買う。

28日 有栖川宮の懇会に招かれ、16時頃から参上。岩倉殿、大隈、山口、福羽、柴原など同席。

29日 青山の伊地知を訪問する。宮島が先に来ており、夕方帰宅。今夜、西郷に晚餐に招かれ、川村、大山など同席。

30日 昼食後、両伊地知、宮島と隣農舎に同行する。舎内樹木鬱蒼として心神爽快なり。帰路伊皿子町の鰻屋で正治の馳走になる。

7月1日 今朝、荒川が来て生野の返事を告げる。登庁して山尾に話す。午後水交社の会日につき出席。

2日 井上より碁会に招かれ、岩倉殿、大隈、渡辺昇、村瀬秀甫、小林鍊次郎、水谷縫治、内垣など来る。午後米花堂にて画会。西国行きの餞別に報いるものなり。川村、雨谷も来る。

3日 頼朝丸の検分として8時15分発の列車で山尾と横浜へ同行する。益田孝、小林、長谷川も同道する。12時発の列車で帰る。雨天のため難儀する。午後岩倉殿の碁会に参上し、22時過ぎに帰宅。

4日 宮島、両伊地知、本田などと終日飛鳥山の扇屋に遊ぶ。今夜北代正臣に招かれ、岩村兄弟、池田判事、渡辺清兄弟、東久世など同席。

5日 安川、石井、佐伯、内垣などを晚餐に招く。大脇、上州

より帰る。

7日 井上参議来る、財政論あり。

8日 上野精養軒において元田、佐々木と密談す。

10日 岩倉家に暮会あり、招かれる。

11日 両伊地知、宮島、本田と新燧社を見分し、帰途川長で飲み、23時頃船で帰宅。

12日 大山へ大脇と同行する。

13日 前田来る。小林明日帰局につき、午餐を供す。中津人鈴木某来訪。瓦斯局の人来る。午後川崎正蔵、練尾師某来る。

16日 川開きにつき大脇など船で観覧する。

17日 今日午後吐瀉あり、甚だ疲労す。

22日 大脇父子、おとよ、幸蔵、鹿兒島へ行く。

23日 遷幸。

26日 幹山焼大鉢一個、急須一個、茶碗十個お土産として拝領。土方へ行き、売茶亭へ行く。

27日 青山の伊地知へ行く。本田、宮島同伴する。

28日 宮内省へお札に参上。

29日 水交社へ行き、両石井に会う。

30日 大山へ食事招かれる。松田、本生、本田来る。養田の主催で画会。

31日 今朝、河村来る。学校費の件なり。宮島来る。パール親類を同伴してくる。

9月28日 正午の陪食を仰せつかる。北白川宮、伏見宮、副島、佐々木その他宮内省の勅任官など同席。副島がロシアの憂慮

なさるべきことどもを両宮に向って申し上げる。食後皇居の造営を三年ほど見合せていただきたい旨申し上げると、快く承諾にられた。今夕、若松にて画会あり、天雨、呉山、雨谷など来る。

29日 工部省にて西の丸の地質測量絵図を一見する。午後、筑前新入村より豊前門司ヶ浦までの鉄道線測量絵図を一見する。これは小野友五郎の調製によるものなり。

30日 今朝、天皇に地質測量図をご覧に入ると絵図はお側に止め置かれた。

宮内省にてジャワ米の御飯を食べる。午後、宮島と芝山内を散歩し、本田を訪ね、晚餐す。

10月1日 午後、石川県人長谷川某来て、鉄道建築の事を話す。晚景青山の伊地知の亡父50年祭につき行く。本田、木場、宮島、呉山など同席。揮毫あり。

2日 13時前より家を出、上野池之端仲町紙屋義兵衛にて扇面紙、白紙各一束（扇は2円、白は95銭）を買い、松源へ行く。岩村通俊主催の暮会があり、大隈、伊藤、山田、尾崎、児島、山口など来会する。暫時にして精養軒へ行く。佐々木、土方、元田など兼ねての約束により集合。財政の件につき伊藤参議より吉井には既に内話いたし候につき、話しても差支えない旨御沙汰があった旨元田より聞き、有り難き事と感銘する。

3日 今朝9時から日比谷大神宮で鑑賞会があり、ドイツ公使、書記官他にドクトル一人を誘い見に行く。珍宝あり、とりわけ前田家から出品された探幽の画、桜井の駅の図

に朱舜水の賛は珍しく思う。賛の文は湊川石碑の原文なり。そこから宮島、伊地知恒庵と散歩し、金花堂で巻紙を買い、又越後屋で反物を買ひ、浅草へ行き、薄暮帰宅。昨夜暴風近年希なる大荒れにて諸処破損する。安政3年
4日 以来の大風といい潰れた家は千軒以上、死傷者は数百人、宮内省へ参上。

5日 今夜、伊藤参議、西郷、大山、宮島、林董、清国の黄遵憲、通弁の某を招き晚餐を供す。

山海経に禹の頃既に日本にも人種があったことが見える。清国皇后は満州人種より立つ后の出る家筋はなし。爵には俸禄が在り、数代続き一代のみというのはいない。以上は黄氏の説なり。

欧米各国の裁判には罪人にしゃべらせるものがあり、しゃべった後嘘をつけば神を欺くという風習が在り、人民は決して嘘をつくことが無い。日本では拷問が在り、嘘をつく者を脅して真実をいわしむる事ありしにこれを廃して後、人おそるるところなし。

以上は伊藤の説なり。

6日 暴風により新燧社が崩壊し死傷者がある旨新聞に報道されているので14時から見舞いに行く。

7日 水交社の集会に出席。

8日 群馬県令楫取素彦来訪し、鉄道、電信の相談あり。米沢人堀尾重興来訪し、生糸直接貿易連合のため出府したと云う。午後金沢人長谷川準哉来り、鉄道の件を話す。

9日 隣農舎へ行く。先夜伊藤参議の話で外国の裁判所におい

ては罪人に嘘をつかない事を誓わせ、嘘をつけば神を欺くという宗旨の教え人々の脳髓に在れば決して嘘をつく事無し。日本にては何もおそるものなし、嘘についても何もはばかる事無し、故に拷問によりて糾問せしなり。また学校にても宗旨の事をもって誓う事あり。日本にてはただ文字を読ませるだけで基づくところがないと語った。

10日 一柳栗香、恒庵、梅塘等と伊勢虎で鰻を食べ、そこから駒場野砂糖製造場を見る。夜松方へ行き、20時頃まで談話する。

11日 今朝元田侍講入来、御内命の件拝聴するに一柳の事なり。副島の一件も詳しく聞く。今夜吉原へ行き財政の件に付き談論する。

外債を起し、正金のみになれば物価は下落し、外国品よりも下落すれば人民は内国品を買う。故に輸入は減る。これに反し正金少なく、紙幣多ければ物価は騰貴する。物価が騰貴すれば民は廉価の品を求むるため、外国品を買うべし。外国にては常価をもって物品を製するにより、ますます輸入が増加すると、又一理なり。外国にては物品を甲より乙に売り、乙の証書を取ってそれを銀行に持参して金を借用するという。

12日 雨、水交社に行く。

13日 伊藤参議、工部省に来る。食堂にて密談数刻、黒田の辞表の一見を詳しく聞く。井上外務卿が同人に面会し遂に納得させたとの事。綱紀不振、先ず官員を正しくするの

職を置きたい旨申し上げ、やや同意を得る。

退出時に佐野に面会し鹿籠金山の件ならびに工部帆前船の義を談す。

有栖川宮家に参上し、16日新燧社御見分の件につき確認した所お出でになるとの返事なので直ちにその旨を社へ連絡する。今夜伊藤に基会があり、招かれて行く。

14日 宮内省に出仕し、西の丸の建物は日本風になさるのか、それともしばらくは見合わせるようになるのか、早々に御決定願いたい旨談合する。

午後、澹泊社の会に出席、菊画を出す。池原日南の評あり。

15日 幸蔵よりの手紙が今朝着き、すぐに返事を出す。江口某、岩下氏よりの書状を持参して来る。宮内省へ出仕し、建築の一件で談合する。午後三田農具器械製造所を見る。

16日 有栖川宮御父子、佐々木高行、土方久元、杉孫七郎、伊丹重賢などと新燧社を見、中村楼で晚餐。山尾庸三も来る。

17日 神嘗祭であるが、有栖川宮が代行になる。

午後、見晴楼へ家内一同とお澤父子を召連れて午餐し、汐湯に入る。15時から本田へ行き、芝山内、紅葉山、丸山など散歩し、夜に入って画会あり。正治、武治、その他恒庵、呉山、天雨など来会する。

18日 午後、図師来る。経済論あり、いちいち尤もの事なり、正金銀輸出入の件を支配するゆえ紙幣を減却するとも物品下落せずと云う。実に尤もなり。工部省にて交換紙幣

を作るべしと云う。

今夜西郷へ行き、椎原としばらく談話する。

19日 昨夜、栗子山隧道貫通の電報が三島通庸より来る。大久保の神靈へ告げよとのことゆえ承知の旨返電する。

石井邦猷より本日面会したいとの申し出があり、水交社で面会する。用件は、唐津の人長谷川某8年間欧米で鉱山学を研究してきたにつき、工部省で採用試験をしてくれとのことであった。

前原一誠に異心あるにつき警視局で探索を大久保に求めたところ、二度まで自身でかばった事実を今夜石井から聞かされる。

オジェシ来れりとなり。

20日 今夜富士見軒で村田経芳、海江田兄弟と戯球する。今日岩下が着京のよしを聞く。

21日 今朝、宮島士と大久保の墓に参詣し、栗子山隧道貫通の報告をする。これは三島より頼まれたからである。帰途、

正治を訪う。昼飯を馳走になる。席上、農事談すこぶる盛んなり。唐の徳宗の時経済学士であった劉晏の話が出る。

今日工部省で山尾から聞いた話では造船は百分の四を削り六を残すという。

清水士来る。

今夜西郷にて「オジェーシ」柏原会食同人曰く、日本の金銀の鉱脈は小さいため、大きな機械を用いる事ができ

ない。したがって利益は少ないであろう。ただし銅山は利益が出るであろう。ドイツの鉱山は製造場を政府が支配し、鉱石は人民が持参し、それを製成し、幾分かを人民に渡し、年末にこれを調査し多量に鉱石を持参してきた者に褒賞を与えるために盛大であるという。

今日、有栖川宮、西郷など習志野へ出張。

22日 杉本正徳来訪。

関山源三郎が大審院上告の件で願いが達した札に来る。得能病気に着き慰問する。

岩下帰京につき今夜本田と訪問する。

24日 午後、栗香とともに梅塘を訪い、それより三人で目黒橋和屋へ行き、一酌し、辰五郎植木を見て、松金楼で夕食、汐湯に入り、22時過ぎ帰宅。本日始終歩行し、はなはだ爽快、安眠心地よし。

25日 太政官へ出頭し、大隈参議に面会。帆船の件につき上申書を差し出し、差し支えの事情を詳しく述べる。

宮内省へ出頭し、杉大輔に皇居建築の件につき早々に御決定なされたき旨申し上げる。

午後恒庵、天湊がきて囲碁。夜に入り、22時前より天神の夜市に行き、植木菊などを買う。

26日 西郷にて刀剣目利き会あり。本阿弥父子、今村、益満ら来会。

28日 今日午後から大久保辺へ植木を買いに行く。岩下、宮島、本田、伊地知恒など同伴。

29日 今日午後、有栖川宮父子が品川硝子製造場へお出でにつ

き同行する。

今夜、本田来る。

今日、幸蔵帰宅。岡部も出京。税所より一封来る。

30日 今日、山田実雄、上村叶来訪。照国神社再建の件なり西郷、大久保へ行き扶桑商会の件につき相談する。

午後水交社へ行く。

今夜、下条、岡部来る。

幸蔵がネルソン氏の士官を教育する三ヶ条の話をする。

一に曰く命令の出た時にはその善悪を考えるなかれ。二に曰くフランス人は敵視せよ。三に曰く国と王を悪く言うものは敵と見よ。

31日 宮島より金剛の舞台開きの招待を受け本田を誘おうと訪ねたところ小川町辺へ移転したという。水交社で午餐し、麻布の一柳を訪う。過日、御園に臨幸のおり自分も同行し、種種の品を展覧に供し、宮内省卿に掛干をすれば全国で四百万石の出来増になる旨申し上げる。更に属官らに稻機への干し並べ方はこれではまずく、干しあがることは難しいのもう少し薄く並べよう話し、古歌にも

刈り入るる山田の上の稲畑に

あらはれわたる秋の夕風

とある旨紹介する。上にもよほどきげんよく16時過ぎに還幸、しきりに感謝のお言葉がある。

幸蔵今朝船に帰る。

広業商会武富善吉郎、新燧社彭城昌実ら来るが会わず。北代、中村忠なども来る。

11月1日 東京府知事書記官、石井邦猷、本所区長設楽某らと、新

熾社及び傘製造所を見学し、浜町常盤屋で晚餐。

2日 釜石鉄百六十トン新橋へ荷揚げされ、山尾、河野、佐野と検分に行く。

宮島翁の病氣見舞いに行く。

一柳、南谷、梅塘、恒庵来る。この会は橋と柿を御馳走するためなり。一柳の歌に、

御目出度の橋の実はなりにけり

千歳柿を「ば」君にちぎりて

3日 8時過ぎ連兵場へ行く。すでに各国公使を初め、各勅任官も到着。9時過ぎ臨御、直ちに騎馬で巡覧。今日から大礼服を着用、いと勇ましくおみえになる。式後、山尾と同車して参内し、宴後12時過ぎ帰宅。休息後、隣農舎へ家内一同で出かけ、芋を掘り、子供等大喜びする。夕景、精養軒へ行き晚餐、21時から延遠館の夜会に出て、23時頃帰宅。

4日 水交社の定例の会に出席。大滝氏を今夜招待していたので先に会を失礼する。大滝は近頃上京の故なり。

5日 今朝、下痢ゆえ出省せず。

6日 今日も不参。天湊、恒庵来る、開拓の件なり。宮内少輔から来る九日聖上の西の丸天覧につき出席せよとの通知来る。

7日 平臥

8日 本日より出省。過日太政官からつとめて外国品を省き、国産品を使用すべしとの達しを聞く。夜、木場へ行く。

祭なり。

9日 9時、西の丸建築場で天覧につき、山尾、平岡とともに同行し、山里お茶屋で拝謁。今日、吹上御苑において近衛士官などの競馬の天覧に同席せよとのお言葉により終日拝見。お弁当は吹上茶屋にて下さる。参議は寺島、川村、山田が出席、三条、岩倉両大臣も昼より出席。終了後吹上にて宴会に出よとのお言葉なれど退室。

10日 水交社へ行く。本田が来る。夕方より同伴して太田楼で晚餐。新橋で戯球。帰路、琴平植木市を見る。

11日 午後宮内省へ出頭し、藤波侍従をもって海軍士官相浦有馬から献上のアメリカカリホルニヤ州の名所写真40枚をさし上げる。

宮内省で皇居は日本造りにとの内定につき、紫宸殿などの絵図の調査の相談を受ける。お庭の菊の拝見を願ひ出て、林董と残らず拝見して16時頃帰宅。

夜、宮島を訪問。

清国公使何如璋、張斯桂より来たる18日晚餐の招待状来る。

12日 退省時に金杉の汐湯に行く、先に寅などが来て待つていた。

13日 松方に午餐に招待され、山尾と同道して行く。川村、品川も来る。応拳筆の光格天皇脩学寺行幸の図あり。天皇の御製を品川から聞く。山口直友来り、泊。

14日 山口と囲碁。午後より福羽へ行く。同席者は徳大寺殿、東久世殿、藤波殿、松田、近藤、内垣など。徳大寺宮内

卿から来たる18日菊花拝観に出席せよとの通知あり。

15日 工部省で会議。退出し、万代橋の齒科医渡辺に行くも不在。帰路伊地知恒庵に立ち寄り、健次郎の袴着祝いにつき内祝。仲太来る。

16日 本日17時まで工作所の件で会議。夜、精養軒で三宮夫婦、鈴木、中井らと会食。

17日 今朝、兵庫県令森岡三池、小田島内務六等属、李田登太など来る。

山尾、平岡と共に宮内省へ出頭し、皇居造営の件につき評議する。12時工部省へ出仕、16時過ぎまで会議。

夜、西郷にて刀剣会あり、税所所有の貞宗、金光研ぎ上がってくる。

18日 13時菊花拝観に参内。各国公使並びに妻女、各勅任官並びに妻女など出席。聖上、皇后の宮出御。

夜、清国公使より晚餐に招かれ、井上外務卿、榎本、田中、松田府知事、上野、吉川、徳大寺等同席。

19日 工部省にて賞与の会議が17時に及ぶ。宮島へ行く。幸藏、龍驤艦より帰る。

山口直友来る。
24日より発足の旨、税所に電報。

20日 川村にて午餐。山田、西郷、松方、土方、品川等同席。食後、三田育種場の競馬を見る。

今夕、本阿弥平十郎来る。綱吉將軍差料の正宗の刀を柳沢に遣わされたという由来のものを三十円で買う。

椎原、岡部も来る。

島津家に堀尾正宗と名付けた刀がある。この刀は関ヶ原の時家康の本陣へ加賀井弥三郎という者が切り入った時、堀尾帯刀左衛門という64才の老人が正宗の刀を振るって防戦し、遂に敵を切り伏せたものを徳川家から拝領したという。

本阿弥家は足利尊氏の刀剣奉行を勤めたのを初めとして、豊臣家の時分に、荒木撰津守が謀反を起し、本阿弥を使者に遣わした所、城の上からこの刀を目利きせよと云って刀の表裏を見せた時本阿弥は青江貞次と目利きし、それが的中したので本阿弥に相違ないとして城内へ通され、一旦和議が整い、その功績によって50石の知行を得たという話を聞く。(以上、「四」)

明治14(1881)年

1月1日 天気晴朗、7時過ぎ参内し、8時に両陛下に拝賀。今年

より勅任官の妻は緋袴で朝拝し、外国公使の妻も同断。

9時に青山御所に参殿、皇太后宮に拝謁。それより三条、岩倉両大臣へ年礼。

2日 風邪にて箪居し、白河楽翁公の遺書を見て感あり。夜、西郷を訪う。本阿弥、益満等来会する。

3日 終日閑居。

5日 終日閑居。大山お信、誕辰につき今夜祝宴、大いに興あり。

6日 工部省へ出頭。
水交社の初会に出席。

- 7日 工部省へ出仕。
- 10日 幸蔵、軍艦へ帰る。
- 13日 ロシア公使館へ年礼に行く。
- 14日 工部省へ出仕。午後、寅治を連れ、渡瀬を誘って松金へ晩餐に行く。
- 15日 元老院の開院式例年の通り。
電信学校焼失の知らせを聞き車を走らせて見に行く。工部卿山尾外務少輔芳川も来ていた。
午後、水交社へ行き、神明前を散歩し肌着などを買う。
宮島を訪う。午後本田へ行く。鈴木開拓先生他一名に面会する。
- 18日 工部省で皇居造営の評議がある。図師民嘉防火の見込書持参する。清水誠来る、困甚。
今夜、延遠館にて松田府知事夫妻主催の夜会があるが足痛のため行かず。
伊地知、一柳に当用日記一冊を送る。返書に左の歌二首あり
- 事もなき身こそ安けれ悠々と
いささか年も暮れにけるかな
- 19日 昨夜より雪降る。昨年11月より天気続き、東京では希なことという。今年もまた豊年と思ひ甚だ愉快なり。
今日足痛につき宮内省への出仕を断る。
- 20日 今日足痛ゆえ不参。
九重の大内山の今朝の初雪
北垣、京都府知事に転任も見ゆ。
伊藤参議より熱海からの書簡が来る。
- 21日 本日不参。
松方来訪、税所の辞表の件と堺県を大阪府に合併するの話をあり。
- 22日 本日不参。
午後より日本橋柏木亭赴き、下条、山口、岡部と困甚
- 23日 近々幸蔵出立につき送別会を開く。午餐に木場、帖佐、図師崎等招き、晩餐に西郷、大山、中井、大久保、野津らを招く。
今日河瀬秀治来訪、過日欧州より帰朝という。製造蒸気水気器械を政府で設立して人民に貸す話、造船者に政府から金を貸す話などを聞く。
- 24日 米花堂で澹泊会、池原、河村等も来る。
- 25日 今日より出省。
上野博覧会場竣功につき検分のため山尾出張する。
午後石井省一郎、宮島、伊地知恒庵来訪。

ロシアと清の談判が整った旨ルードル社から電報あり。
清国人を挙げるのに孝廉をもってすることがあるとの宮
島の話。

皆人は唐につくとも我杖は

大和島根にたてんとぞ思ふ

右は平田篤胤の歌。

26日 今晩一時半頃より15時頃まで下谷、本所、深川辺に大火、

お玉方池から出火したといひ、西北の風激し。

今夜、大山にて幸蔵へ饒別の食事あり。

平賀源内は学者で外国の事情調査を八代將軍から命じ

られた人で電氣を製造したことがあるという。常に金

百円を所持し、百円は人の呼吸の如きものなりと云っ

ていた由。矢口の渡しの浄瑠璃本を作った人なり、右

聞いた所を記す。

27日 明後29日御陪食に参内するよう宮内卿より連絡あり。

28日 明日の御陪食は足痛にて不参の旨奏上を土方に頼む。

29日 種子田誠一馬車鉄道の件で来る。幸蔵、今日から出立の

予定のため大久保利和、大山夫婦、岡部等来る。

30日 旧暦の元旦、天気晴朗。

孝明天皇の御例祭のため清国公使館への年礼は明日にす
る旨の連絡が太政大臣よりある。

今日より幸蔵龍驤艦へ乗船するため13時30分発の列車で
横浜へ行く。品川まで送り、そこで別れ、伊藤参議を訪
う。不在につき帰る。鎮武、正彦、岡部、帖佐等横浜ま
で送る。寅、謙、仲等は新橋まで帰る。

31日 伊藤参議工部省へ来て、敦賀行きを相談する。

新燧社竹内来る。またおゆう来る。

今夜木場来て、囲碁。

2月1日 午後、渡辺千秋の旅館を訪うも不在。化学生徒採用の件

を手紙に書き置き、通町辺を散歩して帰る。

今日、龍驤艦拔錨の予定のところ明日に延期の由。

2日 今朝4時龍驤艦出帆の予定と聞く。

松方へ木場の件を頼みにやる。

退省時に築地のペール方へ病氣見舞いに行き、帰途伊勢

勝へ立寄り靴一足を買う。

この夜、中村弘毅、安場、安川、函師、等来る、鉄道論

あり。釜石阿仁等の如き大事業を起す場所にはその総裁

を選ぶ事が尤も肝要である。論は如何に良くても20年以

上実地の修行をした人でなくてはその任に適せず。ドイ

ツでは適任者を選ぶ事が非常に困難との話である。

外国人を雇い入れるのは最も大事なことである。よき人

ならば事業に順序を立て、後戻りをせず、非常な利益に

なる。後戻りをすれば月給どころではなく、実に大損な

りとのこと。

3日 10時、宮内省へ出頭、皇居の絵図面で評議。

午後、工部省へ出頭せず山尾に頼んで直ちに帰宅。本

日終日雨。

この夜節分、水谷来り、囲碁。

アメリカの元老院は諸州から公選するという。国会だけ
では不都合な事があると林から聞く。

4日 今日立春。

午後、清国黄遵憲来訪し、今度の木村少佐拘留の件について大山に事情を説明してくれるように依頼があり、また日本誌編集のために地図を注文されるが、いずれも造作も無い事と引き受ける。夜、大山へ行きその旨を話す。

5日 工部省より渡辺千秋と同車して赤羽工作所へ行き、糸取器械買入れの相談をする。錠前一つ買ひ、草刈器械の故障の修繕を頼む。

夜、青山へ宮島同道で行き、話す。

6日 大山、岡部、山本、帖佐等と隣農舎へ行く。

今夜、大山で食事し、帰途黄遵憲を訪うが不在。

7日 伊藤博文工部省へ来る。

退省後、清国公使官黄遵憲に面会し、大山に事情を説明したを話す。

夜、精養軒で中村博愛より饗応を受ける。

税所より手紙が来て、木場の一件を云ってくる。

8日 山尾、林、平岡等同道で有栖川宮の建築現場を見学に行

くと宮がいて茶菓を御馳走になる。

山口が明日より宮城県に出張につき、饒別の約束をして
おいたが帰ってこない。

今夜、大久保宅で前田主催の琵琶音曲があり、山県、渡

辺千秋、石黒某など来会する。

井上鉄道へ一封出す。

9日 午後恒庵、岸良等を訪うが皆不在。

渡辺千秋帰県のため暇乞いに来る。

税所に一封を出す。

10日 今朝、中井が来る、前田の婚姻の件なり。午後、利和も来る。同じ件なり。それから前田に面会し意見を述べる。今夜、新橋で戯球の後、鰻を食い、帰途琴平夜市を見て帰る。

新潟県令永山盛輝より干魚一尾到来、山尾より貝到来。

11日 9時30分参内。祭礼後宴会。各国公使出席。

夜、野津で宴会、千原、夕田に面会する。神田辺大火、
帰途九段坂に出て見ると火勢猛烈、得能へ見舞いに行き
23時頃帰宅。

12日 午後、水交社へ行き、また新橋で戯球。20時前帰宅。

13日 小森沢、下条、岡部等と四谷の伊勢虎にて昼食。それから丁銀という豪商所有の別荘を見ると風致ある所で四千五百円で売りたいという。晚景帰宅す。

今朝、前田正名来る。縁談が整うだろうという。今日中井、小河など来た由。

14日 今夕、原田宗助、伊藤弥二郎、和荒川巳次を招いて食事を饗す。

本日午前より雨降る。

薩摩の国山川鰻村に烈火に耐える粘土を発見したと今日の新聞にある。

15日 宮内省へ紀元節のお札に参上。

午後、江副が来て同道して芝のあたりを散歩して松金で晩餐。

宮内省にて元田に面会したところ、皇后の宮が梅を愛す

るの説を和文でお書きになりそれを読んで副島も感服したという。また11時から12時頃まで1時間ばかりの間に12首の和歌をおよみになった事などを拝聴する。

16日 朝、雪の後雨。午後、宮島を招くが来ず。

3月1日 博覧会開業式であるが病気のため欠席。

午後、新橋まで出向き戯球。

伊地知恒庵来る。

茨城県下開墾願書へ調印して渡す。

2日 今日より出省。伊藤参議省へ来る。退省後、新橋へ行き

戯球。

今日税所へ返書を出す。

3日 堀双翠の北海道赴任の送別会を米花堂で開く。

4日 今朝、参内し御学問所で拝謁。皇居の絵図面につき詳しく説明申し上げ、篤とご覧の上宮内省へ御沙汰を下さる

よう申し上げる。更にさる21日御近火のせつに、御内儀まで参上したことは、後でつらつら考えて見るに、お側に奉仕する身ではないものとして誠に無調法のことと恐れ入る旨申し上げ退出。

今朝、ハワイ王到着し、延遠館に滞在。

5日 午後、岸良俊介を訪うも不在。明後7日川村雨谷同伴で参上するよう置き手紙をする。それから木場の妻の病氣見舞いに行く。また富士見軒に行き戯球、食事。海江田信義来る。

6日 終日雪降り、家を出ず。

岡部、近々帰県につき午餐の饞別をする。山本伊八、仲

太など来る。鎮武も来る。

今夜、群馬県の農民集合して穏やかならざる模様ありとの電報が前橋から来る。

7日 今日、工部卿から皇居の造営係を担当せよとのはなしがあり、無調法ながらせいぜい尽力致すべく、承諾する。

退省後、本田へ行き暫時話す。それより水交社へ行き、精養軒で戯球、食事。22時前に帰宅。今朝、椎原帰県の暇乞いに来る。

8日 ハワイ王来日につき桜田練兵場で飾隊式あり、寒気甚だしく昼より雪降る。伊藤参議、松方練兵場からの帰りが

けに工部省へ来る。午後、海軍省へ行き兵庫の石炭の件につき小森沢に話す。

岡部、暇乞いに来る。

下条、刀剣の件で来る。

9日 阿仁鉱山御雇いのメツケルが工部省へ来る。鉱山事情を詳しく聞く。

午後、下条と同道で小川町並木方へ行く、刀の売り物があるためなり。しかるに既に売れており、帰路本町田沢へ行き、幅物を見、また柏木へ行き晚餐。新橋で戯球、22時前帰宅。

10日 桜井純造来て、かねて天皇にご覧にいられてある絵図をとくとご覧の上御決定下さるようくれぐれも依頼される。宮島より左の歌を見当候と云って書いてよこす。

こころとは遣ふ事なく休め置き

身をいとまなく遣ふべきなり

養生は飢ることなく飽ずして

ものおもはざる外はあらじな

痛き針苦き薬にあつき灸

くるしまんよりかねて慎め

今夕宮島へ行き、病氣見舞いの札を述べる。水戸の寺院から出たと云う土佐将監の画に世尊寺定成の詞書の巻物を見る。

11日 今日、ハワイ帝の工部大学校参観につき9時に延遠館へ迎えに行く。10時前同車して大学校へ行き、諸処を見学して12時前帰館。

今夕、下条、宮島、清水、江副等来る。囲碁、画などで遊ぶ。雨しきりに降る。

12日 西の丸営繕局出張所へ出向き平岡と左の通り談合する。

一、地ならしの事

一、石材、木材の現在高を取り調べ、なお不足の分は早々に注文する事。

一、謁見所建築用の石材を紫宸殿などへも用いること。

鮫島の家内昨日フランスより帰国との知らせがあり、午後訪問。

今夕、延遠館でハワイ帝と会食。同席は文部卿、司法卿等。

13日 本田が来る。同伴して恒庵を訪うも不在。同家で宮島を

待つ間に昼飯を馳走になる。上野博覧会に赴き、美術館から第一、第三館を見る。弁天三河屋で晚餐、帰途万代橋辺から車に乗る。

14日 11時頃ロシア皇帝破裂弾で撃たれたとの電報が来る。直ちに太政官その他に知らせる。工部卿も不参につき連絡する。今後世界の形勢は如何に変わるか、喜ぶべき愁うべきものあり。水交社へ行く。

15日 昼食後西の丸へ出張。今日から地面平準方に着手。

16日 ハワイ王の出發につき、勅任官以上は新橋停車場まで送るが予は不参。

午後、高島に売茶亭へ招待されて閑談、22時頃帰る。

17日 退省後本田と袖ヶ崎へ行き、悦之助殿のお悔やみ申し上げる。

今夜、大山で食事。同席者は中井、谷元、高田、種子田等。

高島遠武来る。

18日 今朝、平岡、本阿弥、田沢等来る。またおもと堺へ行くとして暇乞いに来る。倫光の刀の研ぎが済んだので持たせてやる。

午後、山尾、中井と同伴で海江田へ観梅に行く。

19日 今朝、元田侍講が来て海軍省の混雑の件につき意見を申述べよとのことなので愚見を申上げる。

西の丸へ出張し、種々平岡と話す。

西郷が熱海から帰京したとて訪ね海軍の件につき話す。今日より腹痛、下痢につき伊東方成に往診を頼む。

- 20日 今日、本田等と博覧会に行く約束であったが不快につき
断り、終日臥床、由良来診。
- 21日 福昌寺泥和尚来て、寄付金の話あり。終日雨。
税所より書状来る。
野蒜、山口へ一封を出す。
- 22日 今朝平岡来る。
午後、一柳熱海から帰ったといつて来る。今夜、宮島、
伊地知馨来訪。孟子の講義あり。
- 23日 佐藤与三が来て、釜石に長谷川を派遣する件で伊藤参議
と談合した旨話す。
- 24日 今朝宮内省へ出頭し、島津家の忌服の件につき徳大寺殿
に話す。元田が海軍省の件につき、川村から山田を勧
める件は直ちにお聞きとどけになるとの由話す。
伊藤参議が工部省へ来て刀の手入について依頼がある。
今日、米花堂で画会あり、本田の山水をとる。予は菊花
を出す。
- 25日 今夜宮島と一柳を訪う。
清水来訪。
水道工事と植木の手入を申し付ける。
- 26日 今日、清水へ招待される。大隈父子、大原、田尻、前田
家令、寺西成器、北川某等同席。午餐は日本料理なり。
両国から歩き、高木で筆を買う。
- 27日 一柳、梅塘、栗香、恒庵と同伴で博覧会に行く。桐机一
脚を約定し、代金は三円五十銭。この日晴朗、博覧会を
出て銘々に別れ、18時頃帰宅。
- 28日 黒田の亡妻三回忌につき蠟燭と茶を贈る。五代、昨日坂
地より帰り、茶二筒を贈られる。
今日、水道通り愉快なり。人足どもに金一円を与える。
- 29日 今日、山尾と西の丸を検分し、二重橋辺の埋め立ての件
を話す。それより岩倉公へ参上する。この日鉄道の件に
つき諸省脚輔の会、岩倉公より演説があり時機到来と大
いに歡喜す。
龍驤艦豪州へ安着の電報があつたと榎本から聞き安心せ
り。
- 30日 幸蔵オーストラリアへ無事到着の電報を聞き祝いのため
今夕、一柳、梅塘、栗香、天雨、恒庵等を招いて晚餐。
席画、詩作等あり甚だ面白し。
今朝、和州郡山の土族今泉某が税所の書状と吉光の短刀
を持参する、金装なり
- 31日 10時西の丸へ出張し、松田に面会して地形の件で談合。
それから車を飛ばして上野松源で午餐。博覧会を見、煙
草盆、桐箱、貝、石水鉢などを約定する。それより本阿
弥へ行き、吉光の短刀を見せた所五十円までならば妥当
であろうとの鑑定であつた。
今夕、本田で話し、一柳、恒庵、高島ら来る。懷素の肉
筆を見るが眞贋は如何。三浦香瀾遅れて来る。
- 31日 工部省で松田、平岡と皇城東側の土手の件及びその他の
件を山尾に話す。
午後、イタリー画教師の家に行き油絵を見る。
それより鮫島の祭事に行く。

今夜、大山の食事に招かれる。

今日、画の教師から聞いた話によると生徒を教える際あまりに懇意にすると馴れて云うことを聞かない、あまり厳格にすると耐えられずに去る者が多い、故によく生徒の性質を見極めて、それに応じて教育はしなければならぬ。

4月1日 10時から西の丸に出張し、山里お茶屋で、土方、桜井、平岡等と会う。14年の建築費予算の件、石垣などのことを話し、また今後は週に火曜、土曜の二度会うことを約束する。

山尾、中井、福田と水本邸に同行して梅を見るに、千代鶴、鹿兒錦、安藤梅などの尤物なり。帰路、植木屋孫八へ立寄る。京橋辺で下車し中井と精養軒へ行き食事し、22時頃帰る。

2日 12時より四谷御苑で、徳大寺、土方、元田、山岡、宮島等より午餐に招かれ出席。これは伊地知一柳と懇話するためである。一柳は皇室の山林の件について話をする。

3日 10時45分の汽車で高輪の伊藤へ行き、密談数刻、帰路また汽車で帰る。
今夜、酔人門前に来る。

4日 午前、西の丸に出張し、土方、桜井、平岡等と会す。小御所二階の件、御学問所の位置、御座所を西の方へ三四間移動させる件、宮内省二階の件などを談合。
14時から工部省へ行き、伊藤参議も来る。釜石鉾山に足立を据えることに決定。

松方が来て、伊藤の配慮の件を聞く。

岸良、木場来る。

フランス公使が士官学校へ来るとして鎮武来る。

郡山士族小泉、内田今朝来る。吉光の短刀の代金五十五円を渡す。

5日 10時45分発の列車で隣農舎へ行く。武、寅、伊之介等は人力車で先に行く。梅花満開。我植え置きし梅なので一入面白い。終日竹を切り植付けなどの指図をする。帰りもまた汽車とする。

酒匂正五郎上京するとの知らせが大脇、野津等の手紙であり。

野津より歌遣されたり

若水

中中に老のかげらく初とも

こすれて結ぶ千代の若水

ある山家に花見に物して

山さとの花のたよりは聞かねども

ころあてにもうかれ来にけり

税所へ一封を出す。

6日 今日、神戸造船所払い下げの評議がある。

午後、川村病氣につき見舞い。それより紅葉館で故鯨島の跡目相続の会議あり。寺島、川村、松方、上野、本田等会す。

7日 松方よりフランスのガランツ氏の「鉄道論」を贈られる。

午後、水交社の会に出席。

伊地知一柳が近々旅行に出るので暇乞いに来たという。

畑中夫婦来る。

税所より書状来る。

今日、農商務省が置かれる。

8日 四谷御苑から分配の水蜜桃、林檎、桜、梨などを植える。

今夜大山で刀剣会があり、上杉家の正宗を見る。

来る十日16時に紅葉館に参会の連絡が島津家から来る。

13日18時大隈より夕食の招待あり。11日樺山にて食事の約束あり。

約束あり。

9日 山尾、土方、平岡、桜井らと西の丸に出張。

今夜一柳を訪う。

宮島より米沢織一匹届くが、これはかつて注文した品なり。

り。

10日 栗香、梅塘と北の郊外に遊ぶ。先ず四谷門を出て、士官

学校の裏通り、柳町、原町、喜久井町などを経て高田馬

場に出、植木屋を見る。面影橋を渡り、千歳町、雑司ヶ

谷、鬼子母神前の店で午餐し、帰路、諏訪銀を通り抜け、

西大久保の鈴木為吉を訪うも不在。市ヶ谷より車に乗り

17時帰宅。

入浴後芝紅葉館に至る。これは来月島津邸に臨幸あるに

つきその相談を家令の内田より依頼されているためなり。

出席者は寺島、黒田、川村、中井、伊集院、安田等なり。

帰途、琴平夜市そ見、植木を買う。

11日 聖上9時に門を出て西の丸へ臨幸につき、工部卿、平岡

と共に先着して待つ。到着され、ご案内してお弁当を頂

戴して14時頃帰宅。

御昼食の際、土方から本日展覧の縄張りでよろしいかお

尋ねしたところ、結構との返事ゆえ大いに安心する。

12日 今夕三浦安、宮島来る。

13日 今夕大隈参議宅で晚餐会あり、清国公使何如璋、副使張

斯桂も来会。何如璋に通訳の江川某を通じて電信器械な

どを世話することを申し出たところ、大いに喜び、書き

付けを是非欲しいとのことなので福田にそれを差し出す

よう命じておく。

14日 今朝、岩倉家へ刀剣録を持参するが不在のためそのまま

持ち帰る。今夜西郷で食事。大山夫婦も来る。

15日 今朝、西郷へ行き、川村の件その他密談。これより奮発

いたすべき模様なり。

西の丸へ出張、土方は不参。

午後、元田を訪問する。

16日 今日家族、お澤父子と花見をする。午後前田正名、佐々

木高行、平岡等来る。それより一柳宅で花見会。本田来

る。その他は来ず。一柳は明日より皇室薪炭よう山林検

分につき常州辺より上総、下総、伊豆、相模へ旅行の筈

なり。

今夕、伊藤参議来訪の由、高島から頼まれた書を持参と

のこと。

岩倉殿へ刀剣録と松方日記抜書を送る。

17日 風雨のため終日閑居。墨堤東台の桜花満開なるにこの風雨いと憎く、いと惜し。

18日 今朝山尾へ行き、川村の件、木曾山へ属官出張の件などを話す。また熱海行きのことも話す。それより一寸省を出て、月給を受け取り、赤羽へ鉄管代を払う。西の丸へ出張。山尾も午後より出張。

皇后の宮御殿西の方へ建築の件決定。
午後、植物御苑の役人二人来る、種物数種を与える。
鮫島で晩餐。

19日 ケサ10時農商務省へ出頭し、材木の件で談判。土方、平岡も出頭し、品川少輔へ応接する。15時頃小石川砲兵本廠へ内外人集まり花を見て大いに喜ぶ。河野、土方と同道して村田銃製造場を見学。一日17丁を製造するという。伊藤参議へ西郷などの件を申し述べ、帰路、精養軒で晩餐。

今日、清国公使を訪問する。これは清国皇太后宮崩御のためで、ついでに鉄道調書を贈る。

20日 今朝平岡、河合来る。木材の件の相談と大野利新の事件のためなり。

午後、大久保の植木屋鈴木為吉方へ行き、棕櫚苗、芝などを予約する。

木場、今日から奈良へ出発。

21日 今日米花堂で画会、竹の絵を出す。恒庵の山水をとる。

此の頃花の盛るるに誰も来らず、また花見に語らふ人もなかりければ

風流友の心なきてぞ恨なれ

けふ見る頃のいく日やはある

22日 今日観花宴を催す。本田、宮島、下条会す。

23日 高橋元長鹿兒島県へ赴任するにつき渡辺県令へ一封遣わす。

大野利新来る。折田年秀も来る。

参内し、御学問所にて拝謁し左のように命名されては如何かと申上げた所、なお良く考えた上で沙汰しようとのことであつた。

謁見所 紫宸殿

内謁見所 小御所

御会食所 豊楽殿

控所 齋集殿

御座所 常御殿

皇后御殿

岩倉殿へ面会し、伊地知恒庵のことを願ひ出ておく。
山尾、川村を訪ねるも皆不在。

24日 8時15分の汽車で、名尾、寅、幸治

等連れて熱海へ湯治に出発。保土ヶ谷午餐、南郷で小休止、18時小田原へ到着し、中松に宿泊しようとするも満室。やむを得ず亭主の紹介で片岡へ一泊する。この日三条公も入浴のためおいでの由、今夜は湯元に一泊と聞く。

25日 5時小田原を出発、吉浜で午餐。13時熱海真誠社に到着し、二楽亭に投宿する。吉浜から熱海までの道路が立派

に開通した。これよりさき明治10年故鮫島尚信と遊んだ際各々金20円ずつを拠出して是非開通すべしと勧めたのだが遂に今日のように立派に完成したのは誠に嬉しい。鮫島存命であったならと道中懐旧の情がしきりに起こった。この快挙があつてから、三島の通路も開くべしとの決議が成されたという。

佐々木高行、本野盛亨に面会す。

26日 三条公の旅館相模屋を訪い、揮毫をお願いする。

午後、佐々木等来て、囲碁。

この夜、本田、塩田等と戯球。

内田来て道路の話があり、三島の通路も開くことに決したという。

27日 今朝、佐々木、本野と同伴して三条公の旅亭に参上し、持参したという黄道周の幅を見せられる。

不二屋と佐々木某とが道路の札に来る。

医王寺を訪ね、56年前借用の書四冊を返却する。

28日 三条公の染筆ができた由にて丸茂氏が持参し、更に明日

伊豆山への遊歩に同行せよとの話があり、お受けする。

終日雨、徒然なり。

井上某来訪、この人遠州浜松の領主で河内守といい、閣老を勤めた人なり。

29日 本日、道路泥濘につき伊豆山行きは中止の連絡を丸茂が知らせに来る。

名尾医者 of 診察を受ける。

午後三条公へ暇乞いに行き、工業の不振は全く石炭の利

によらざるに原因すとの見込み書をご覧に入れる。

今朝、佐々木より歌を送れり、その返し

梓弓はるる日もなくふる雨は

きみが情やたちとまりぬる

30日 5時出発し、帰郷の途に上る。これは山尾が近々巡回に出張するためやむを得ず帰ることになったから。

本野一郎と同伴し、7時吉浜に到着し、朝食後、駕籠で11時過ぎ小田原に到着、中松で昼食。それより人力車を雇い、16時過ぎ藤沢着。この夜、当駅へ聖上がお泊まりの由にて駅中が混雑するので江ノ島へ渡つて泊る。

(未完・以下次号)